

教育部

教科書文庫

4

760

42-1909

2500014310

部類

B

飛號

PL

SCHOOL SONGS

統合女學唱歌

第一卷

開成館音樂課編纂



NO

760 類
293
2.46

41039

教科書文庫

4

760

42-1909

25000
14310

1142

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

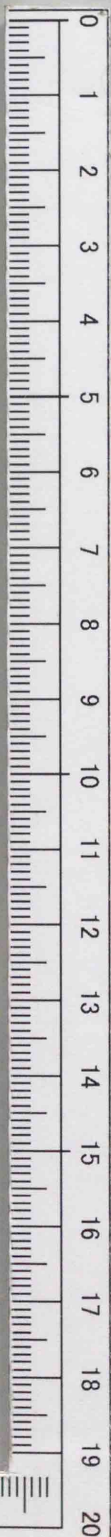
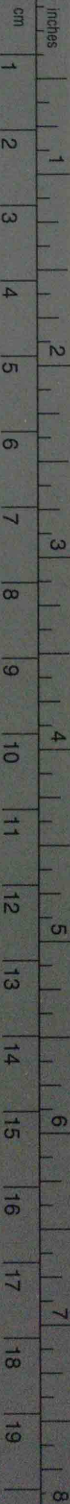


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
760
42-1909
2500014310

文部省檢定
明治二十四年五月五日 高等女子學校音樂科用

GIRLS'

UNION SCHOOL SONGS

統合女學唱歌

(第一卷)

開成館音樂課

編纂

著者權所有

760
293

廣島大學圖書
307 登錄改正
2140

14310

開成館藏版

東京

広島大学図書
2500014310
[Barcode]

廣島大學圖書
印校

廣島大學圖書
印校

16
17

例言

- 一 本書は専ら高等女学校の唱歌教科書として編纂したるものにして、他の諸學科と統合して、教育上所期の効果を十分に收めしめんことを目的とせり。本書はまた女子師範學校其他同一程度の女學校にも適用することを得べし。
- 一 本書の歌詞は女子の心情に適應し、清新にして詩的興味に富み、圓滿なる感情の養成に資すべきものを選んだり。
- 一 本書の樂曲は廣く泰西諸大家の名曲中より優雅にして其樂趣の本邦女子の性情に適するものを蒐め、これに邦人の作を加へ、その歌詞と、樂曲との調和につきては特に意を用ひたり。

一 本書は全部四卷より成り、毎學年一冊を配當すべきものとす。歌曲は單音、輪唱、複音、三重音に類別し、各學年の教授時間と程度とに従ひて略繁簡難易の順序に之を排列したれども、實地教授の際、季節其他の事情によりては必ずしも之に従ふを要せず。

一 本書每卷の附録練習曲は、發聲、音階、音程等唱歌の基本教練として重要なるものなれば、唱歌教授の前に豫め練習せられんことを希望す。

明治四十二年一月

編者識

第一卷目次

單音唱歌

- 金剛石……………一
- 地久節……………三
- 女學校……………五
- 鳥の歌……………七
- 女鑑……………九
- 誠の道……………一一
- 菜の花……………一三
- 花の歌……………一五
- 三保の松原……………一七

- 學びの山……………一九
- 日本三景……………二二
- 江の島……………二三
- 虹……………二五
- 一羽の雁……………二七
- 雪月花……………二九
- 螢……………三一
- 漁業の歌……………三三
- 菅公……………三五
- 靜寂……………三七
- 初秋の風……………三九

○港……………四

○月見……………四

○鸚鵡……………四

○三種の神器……………四

○紅葉……………四

○湖上の花……………五

○四季の雨……………五

○雪中の梅松……………五

○早春の鶯……………五

○月の瀬……………五

○磯千鳥……………五

○露營……………五

○この辭書……………六

○卒業生に別る、歌……………六

○師を送る……………七

附 録

- 發聲練習
- 音階練習
- 音程練習



單音唱歌之部

皇后陛下御歌 金剛石

奥好義作曲

一 金剛石も みがずば、玉の光は そはざらん。

ひともしも 學びて 後にこそ、まことの徳は あらはるれ。

時計のはりの たえまなく めぐるが如く、ときのまの

光陰惜みて はげみなば、いかなる業か ならざらん。

二 水はうつはに したがひて、そのさまぐに なりぬなり。

人は交る 友により、よきにあしきに うつるなり。

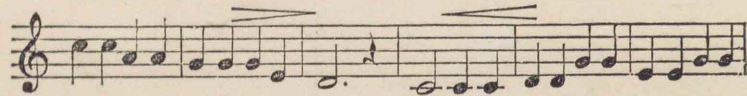
おのれに優る よき友を えらびもとめて、もろともに、

心のこまに むちうちて、學の道に すゝめかし。』

金剛石



1. コンガウセーキモミガカズバ ターマノ
2. みーづはうつはに したがひて そのさま



ヒカリハソハザラン ヒトモ マナビテ ノチニコ
ざーまになりぬなり ひとばまじはる ともによ



ソ マコトノトクハ アラハルレ
リ よーきにあしきに うつるなり



トケイノハリノタエマナク メガルガゴートク
おのれにまさるよきともを えらびもとめて



トキノマノ ヒーカゲチシミテ ハゲミナ
もろどもに ころのこーまに むちうち



バ イカナルローザカナラザラン
て まなびのみーちにすすめかし

地久節

大和田建樹

一 晝はかゝやく大空の
 夜はすみわたる山の端の
 日に、萬代の春長く、
 月に、八千代の秋久し。』

二 遠く久しき行末の
 かくれぬ聲をふりたて、
 榮いはふかほとゝぎす
 今宵は空に名のるなり。』

三 野邊の姫百合女郎花
 たもとに滋き露の恩。
 花咲くをりをたがへぬも、
 祝へや、今日を千代までも。』

地久節

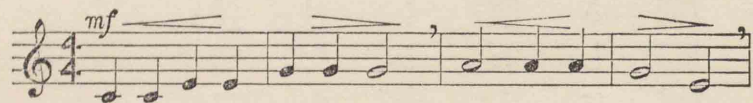
1. ヒー ルハク カガ ヤク オホ ヌラ ノ
 2. とー ほく ひさ しき ゆく ちん ちん
 3. ノー ベー ノー ヒメ ユリ ミ ナ メ シ

ヒさ ニー ヨカ ロエ ズい ーば ヨノ ハル ナガ ク
 ハ ナ ナ サ ク い チ ー リ カ タ とガ とへ ヌメ モ

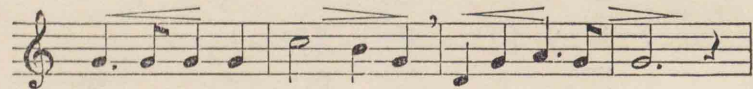
ヨハ ハく スレ ミ ワ ー タ ル ヤ マ ノ ハて ノて
 タ モ ト ニ シ ー ゲ キ ヌ ツ フ ヲ ナ オ

ツコ イー キニ ヤチー ヨラ ノア キヒ サシ
 イ ハヘ ヤ ケ ー フ ナ チ ヌマ デ リモ

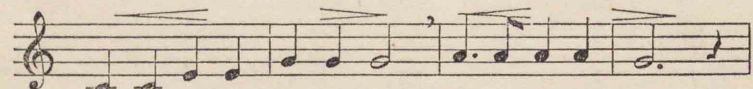
女 學 校



1. ア マ タ ノ ツ ホ ミ モ チ ソ ム ル
2. け ん ぶ と な ら ん ゆ く す ゑ も



チ シ ヘ ノ ニ ハ ノ チ ミ ナ メ シ
け ん ぼ と な ら ん ゆ く す ゑ も



ア マ ホ キ ツ ユ ノ メ ガ ミ ニ テ
た だ こ の つ ゆ に め れ て さ く



ハ ナ サ ク ア キ モ ト ホ カ ラ ジ
つ ぼ み の は な の ひ と つ よ リ

女 學 校

六

女 學 校

一 あまたの蒼つばきもちそむる

教をへの庭はの女を郎な花めし。

あまねき露つゆの恵めぐみにて、

花はなさく秋あきも遠とほからじ。』

二 賢けん婦ぶとならん 行ゆく末すまも、

賢けん母ぼとならん 行ゆく末すまも、

たゞ此この露つゆにぬれて咲さく

蕾つぼみの花はなの『一つひとつより。』

女 學 校

五

大和田建樹

鳥の歌



1. トホネーニヒビクーハツヅミカコトカ
 2. けだかーきすがたーなはいろにみせて
 3. クルハールシラセーテタニマノウメチ
 4. かすめーるあさひーにきえぬとみえ
 5. サシタールカドノートタタクハタ
 6. はるなーつあきふーゆいつなくこ



ヒトナーキモリニーモウタフハトヨ
 きみがーよちよにーといはふはつるヨ
 ヒゴトーニコゾターフウグヒスヤサ
 みそらーにのぼるーはむぎハハク
 アクレーバコエセーヌサハハク
 たのしーきしらべーなをさかす

鳥の歌

楓鹿山人

一 遠音にひゞくは、つゞみか琴か、人なき森にも、歌ふは鳥よ。
 二 けだかき姿を、羽色にみせて、君が代千代にと、祝ふは鶴よ。
 三 くる春しらせて、谷間の梅を、日ごとに木づたふ鶯やさし。
 四 霞める朝日に、消えぬと見えて、み空に昇るは、麥生の雲雀。
 五 さしたる門の戸、叩くは誰ぞ、あくれば聲せぬ、澤への水鶏。
 六 春夏秋冬、いつなくこゑも、楽しきしらべを聞かする鳥よ。

女鑑



1. ユ ツ ル ナ ナ ラー シ チ ツ
 2. ヤ ブ レ シ シ ヲ ラー ジ テ ブ
 3. ナ ダ カ キ フ デー ノ ホ マ



ト ノ イ ク サ タ ス ケ シ ユ ウー
 か ら は リ て を し へ し げ んー
 レ ナ チ ヨ ニ ト ド メ シ サ イー



フ ハ カ タ ナー ノー ツ マ ソ
 ぼ は ま つ し た ぜ ん に
 ヤ ヨ ハ ム ラ サ キー シ キ プ

女鑑

一 弓弦を鳴らし、夫のいくさ

助けし勇婦は、形名の妻ぞ。

二 破れし障子手づから貼りて、

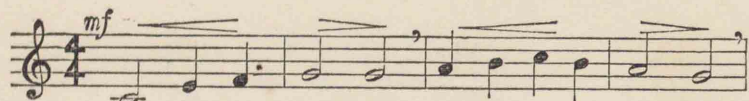
教へし賢母は、松下禪尼』

三 名高き筆の譽を千代に、

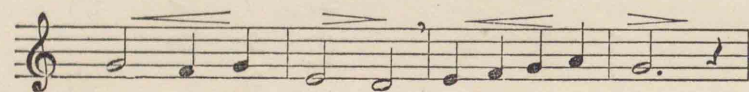
とゞめし才女は、紫式部。』

大和田建樹

誠の道



1. オ ヤ ニ カ ウ キ ミ ニ ハ チ ユ ヲ
 2. し し ん な く ひ と を ば い れ



ト モ ニ シ ン モ ノ ニ ツ ロ
 セ い い よ く み を ば せ む



コ レ ソ ヲ ガ フ ム ベ キ ミ チ
 コ れ ぞ た だ ひ と た る み ち



ツ ト ム ベ シ ツ ト メ ナ ン
 み た び ひ に か へ り み よ

誠の道

一 親に孝、君には忠

友に信、物に慈悲。

是ぞ我が履むべき道

勉むべし、勉めなん。』

羽山 鐵也

二 私心なく人をば容れ、

誠意よく身をば責む。

是ぞたゞ人たる道。

三たび日に省みよ。』

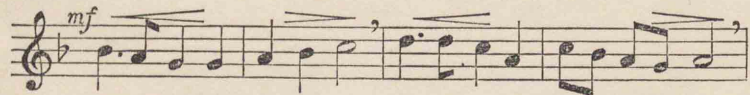
菜の花



1. フクカゼシヅカニカスメルノヤマ
2. ひかげもどかにはれたるのやま



ミワタスカギリハナノハナザカリ
つゆさへそまりてきいろにほふ



ヒバリモウタヒテフテフモアソービ
くさつむなとめあひだにみえて



タノシキハルビ
うれしきながめ

菜の花

一 吹く風しづかに霞める野山、

見渡すかぎりは菜の花ざかり。

雲雀も歌ひ、蝶々も遊び、

たのしき春日。

二 日影もどかに晴れたる野山、

露さへ染まりて黄色にほふ。

草つむ少女あひだに見えて、

うれしき眺め。

大和田建樹

花の歌



1. カ タ チ モ イ ロ カ モ サ マ ザ マ ナ レ ド
 2. し も ゆ き お か し て に ほ ひ を は な つ
 3. ヒ ト エ ダ タ チ リ テ ヒ ナ ニ モ ソ ナ へ て
 4. け が れ め こ こ ろ の い る か を み せ て
 5. ハ ル サ ク ノ ヤ マ ノ チ ガ サ ノ ウ チ ニ
 6. は る た ち あ き くる こ の よ の な か に



ヨ ロ コ ビ ウ レ ヒ ナ ヲ カ ツ ハ ハ ナ ヨ -
 み さ な の き よ き は の き ば の う め よ -
 イ ロ カ ナ メ ツ ル ハ ソ ノ フ ノ モ ヨ -
 く も と も に ほ ふ は さ く ら の は な よ -
 ム ラ サ キ ニ ホ フ ハ ス ミ レ ノ ハ ナ ヨ -
 さ く は な な く て は た の し み あ ら し

花の歌

大和田建樹

- 一 形も色香も、さまざまになれど、喜憂を分つは花よ。
- 二 霜雪侵して、匂ひを放つ、操の清きは、軒端の梅よ。
- 三 一枝手折りて、雛にも供へ、色香をめづるは、園生の桃よ。
- 四 けがれぬ心の色香を見せて、雲とも匂ふは、櫻の花よ。
- 五 春さく野山の千草のうち、紫匂ふは、堇の花よ。
- 六 春たち秋くる此世の中に、咲く花なくては、樂あらず。

三保の松原



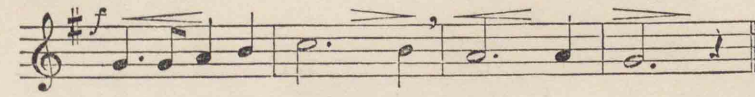
1. フ ジ ノ ヤ マ ケ ダ カ ク
2. た ご の う ら さ び し く



ク モ ノ カ ヘ ニ ハ レ テ
な み の う ヘ に く れ て



ミ ホ ノ マ ツ バ ラ シ ロ ク
み ほ の ま つ ば ら く る く



ユ キ ノ フ レ ル ナ ガ メ
つ き に み ゆ る け し き

三保の松原

一 富士の山 けだかく

雲の上 晴れて、

三保の松原 しろく

雪の降れる ながめ。』

小原千代子

二 田子の浦 さびしく

波の上 暮れて、

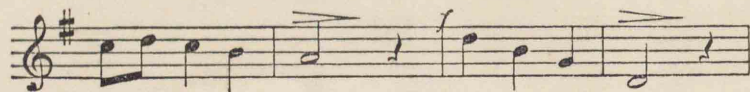
三保の松原 くるく

月に見ゆる けしき。』

學びの山



1. ユ ク ヘ ト - ホ ク カ ス ム
 2. あ れ に た - か く た て る
 3. タ カ ク タ - チ テ ヒ ロ ク



マ - ナ ビ ノ ヤ マ ナ ニ
 ま - な び の や ま ち に
 ア - タ リ チ ノ ソ メ バ



イ ザ ヤ イ ザ ヤ タ ド リ ユ カ ン
 い ざ や い ざ や の ぼ り ゆ か ん
 タ ク ヒ オ ホ シ ノ ボ リ チ ヘ テ



ミ チ ノ ハ ナ チ ツ ミ ツ ツ
 み れ の つ き な み る ま で
 ツ キ ノ カ ツ ラ チ ル ヒ ト

學びの山

大和田建樹

一

ゆくへとほく霞む學びの山路に
 いざやく〜辿りゆかん、道の花を摘みつゝ。』

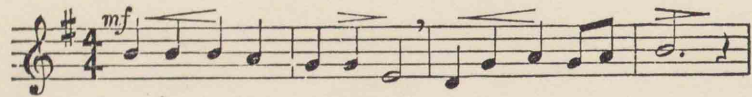
二

あれに高く立てる學びの山路に
 いざやく〜登りゆかん、峰の月を見るまで。』

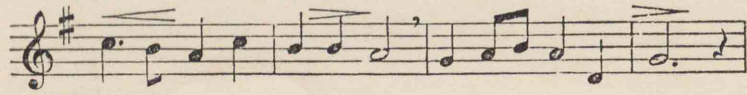
三

高く立ちて廣くあたりを望めば
 たぐひ多し、のぼりをへて 月の桂折るひと。』

日本三景



1. バン ジャク ウミ ニ フリ マ キー テ
 2. しん げん なぎ し ま つ な みー き
 3. ヤ マ ロ キ ヌ キ テ ウ ミ ヅ ラー ニ



ト ビ イ シ ナ ラ ア マ ツー シ マ ヤ
 そ の ま ま あ ま の は しー だ て と
 ノ セ タ ル ス ガ タ イ ツー タ シ マ



ア ラ シ ニ キ ヨ ジ ャン フ ミ ヌ ケ バ
 な み ま に わ た し き ん ひ か る
 イ ハ ガ ネ ヨ ロ ヒ ヒ チ ド シ ノ



ナ ミ ガ ト ス ゴ シ チ ガー ノ ウ ラ
 す な ち を よ る は つ きー に と ぐ
 モ ミ ゲ ヌ フ ヒ ニ テ リー マ サ ル

日本三景

山田美妙

一 磐石海に振り撒きて、飛び石列ぶ松島や。

嵐に巨人踏み行けば、波音凄し、千賀の浦』

二 神劍薙ぎし松並木、そのまゝ天橋立と、

波間に架し、銀光る 砂路を夜は、月に磨く。』

三 山引き抜きて、海面に 載せたる姿いつく島。

岩が根鏡、緋緘しの 紅葉夕日に照りまさる。』

江の島



1. エノシマハアソーブニゲニヨキトコロ
 2. えのしまはすすむにげによきところ
 3. エノシマハナカメモゲニヨキトコロ



スナノハマアルキテハシチロタリユケバ
 なつのひもわするるなみのおとほいに
 ウミノウヘノゾメバフツノヤマモチカク



スゲーニカミノヤシロ
 まつーのかぜはそでに
 エポーシイハハマヘニ

江の島

三

江の島

三

江の島

大和田建樹

一 江の島は遊ぶにげによき處

砂の濱あるきて、橋を渡り行けば、

すぐくに神の社

二 江の島は涼むにげによき處

夏の日も忘るゝ波の音は磯に、

松の風は袖に。

三 江の島は眺めもげによき處

海の上のぞめば富士の山も近く、

烏帽子岩はまへに。

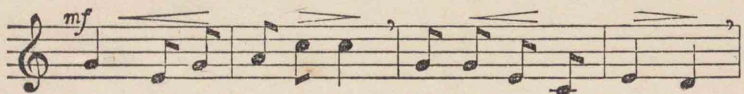
虹



1. ユ フ グ チ ハ レ テ ス ブ シ キ ソ ラ ニ
2. こ く ま た う す く な な つ の い ろ に
3. フ リ グ ル ア メ ト サ ス ヒ ノ カ ゲ ト



ワ タ セ ル ハ シ ノ ー ツ ノ オ モ シ ロ サ
い ろ ど ろ は し の ー そ の う つ く し さ
ミ ソ ラ ニ デ ア ヒ テ カ ケ タ ル モ ノ ソ



イ デ テ ミ ヨ ヤ ワ タ セ ル ハ シ
あ は れ こ れ を か げ し や た れ
イ デ テ ミ ヨ ヤ ニ ー ツ ノ ハ シ



ア レ ア レ ミ ヨ ヤ ニ ジ ノ ハ シ
く ー も の な み の そ の う へ に
ア レ ア レ ミ ヨ ヤ キ エ ヌ マ ニ

虹

三

虹

虹

金子嶺

- 一 夕立はれて、涼しき空に 渡せる橋のその面白さ。
- 二 濃く又薄く七つの色に 色どる橋のその美しさ。
- 三 あはれ、これを懸けしや誰。雲の波のその上に。』
- 三 ふりくる雨と、さす日の影と、み空に出合ひて懸けたる物ぞ。
- 三 いでて見よや、虹の橋。あれ、あれ、見よや、消えぬまに。』

一羽の雁

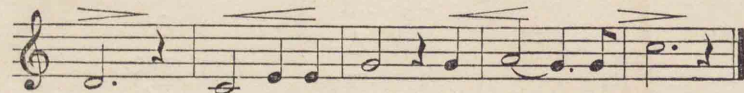
一羽の雁



1. トモニヤロカレツラン ユーフマ
 2. みらにやまよひつらん あーきぎ
 3. オモヘバサビシカラン ウーレシ



ケレカケテ ナクーネモ ロビシゲ
 リのうへに つれーだつ とともな
 キモウキモ カターラフ ヨシモナ



ニ アハレヤカリーガネ
 く あはれやかりーがね
 ク アハレヤカリーがネ

元

一羽の雁

一羽の雁

東宮鐵真呂

三

一 友にや わかれつらん。 夕まぐれ かけて、

なくねも わびしげに。 あはれや、 かりがね。』

二 道にや まよひつらん。 秋ぎりの うへに、

つれだつ 友もなく。 あはれや、 かりがね。』

三 思へば さびしからん。 うれしきも 憂きも

かたらふ 由もなく。 あはれや、 かりがね。』



1. イガコヨホータルココニキーテ
 2. いざこよほーたるここにきーて
 3. ホタルヨホータルヌバタマーノ
 4. ほたるよほーたるからびとーの



テラセフミヨムワガマドーチ
 しはしばやーすめわがにばーに
 ヤーミチテラシテトペホタール
 まなびのまーどをてらしけー



ミツヨツフタツツユトチーリタマトゾ
 むかしのひとていそしみーをとおもひぞ
 コノマチヌヒテウヘニシタニチチキ
 やさしきなさけいまもなほしるけ



カガヤクカモシローノムシヨ
 らるるかなつかしののむしよ
 ミダシシタマノヒカハリアハレ
 ありけりなれがひかりあはれ

螢

高橋 穰

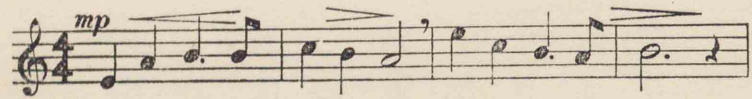
一 いざ、こよ、螢。こゝに來て、照せ、ふみよむわが窓を。

二 いざ、こよ、螢。こゝに來て、しばしは休め、わが庭に。
 三つ、四つ、二つ、露とちり、玉とぞ輝く。おもしろの蟲よ。』

三 螢よ。ほたる。ぬばたまの やみを照して、飛べ。螢。
 昔の人のいそしみを 思ひぞやらるゝ。なつかしの蟲よ。』

四 螢よ。ほたる。からびとの まなびの窓を照しける
 優しきなさけ、今もなほ しるけくありけり。汝が光あはれ。』
 木の間に縫ひて、上に下に、緒をぬき亂し、玉の光あはれ。』

漁業の歌



1. ミワタス カギリ ハルバルト
 2. みわたす かぎり はてもなく



ウナバラ ウヅム ギヨグフセ ン
 はまべに きづく うなのやま



エモノタイハフ コエゴエハ テンチーユスリテ
 このやまこそは わがくにの ふこくのいしすゑ



ソラカキクモリ ウミチユルガシ ナミロルガヘル
 りみんのもとぬ しげきたらきの なにたぐひぞは



アナ ココチヨ ヤ イサマシヤ
 あな たふとし や めでたしや

漁業の歌

中村 秋香

一

見渡す

かぎり遙々と

海原うづむ漁業船

獲物を祝ふ聲々は 天を揺りて空かきくもり。

海を動し、波ひるがへる。

『あな、こゝちよや。いさましや。』

二

見渡す

限りはてもなく、濱邊に築く魚の山。

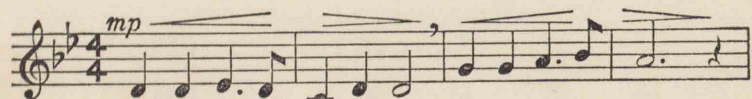
この山こそはわが國の富國の礎利民の基。

茂木立木の何たくひぞは。

『あな、たふとしや。めでたしや。』

菅 公

菅 公



1. ガクシヤノイヘニミハイテテ
 2. ガおほはばおほへニハイキテテ
 3. シイカノワザミヨニスグタ
 4. いきてはきみにつかへカ
 5. アフゲヤアフゲ



タチマチノホルグモノウウヘ
 コニルカクツキハクモリナ
 モシシカハミチハノヨク
 ツキセキメトクトモロトモ



ヨシワザハニカカールトモ
 だーいつベーんのせいのちゆう
 ノーリチツタヘテソノトク
 まーりのかーみとまつーら
 サーカリヒサシキウメーノハ



イカデカキミチチワスルベキ
 しるははてんちのきしんラ
 シハハメヒトハハしヨモア
 ミハハヒタカヨメメデタ
 ヒラハツバミミヨメメサ

三

菅 公

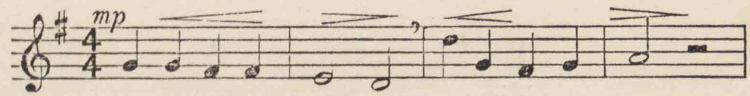
菅 公

大和田建樹

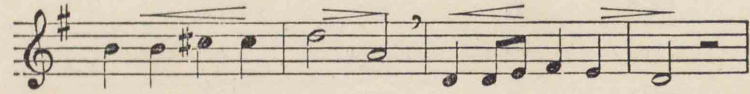
三

一 學者の家に身は出でて、
 よし、禍にかゝるとも、
 おほはばおほへ。雲霧よ。
 二 心こころの月つきは曇くもりなし。
 知るは、天地てんちの鬼神きしんのみ。
 三 文字もじかく道みちは萬世まんによの
 慕したはぬ人は、よもあらしじ。
 四 死ししては國くにの文學ぶんがくの
 御みいつは高たかし。仰あやげ人ひと。
 五 仰あやげや、あふげ、この神かみの
 さかり久ひさしき梅うめの花はなの
 開ひらく御み代のめてたさを。

静 寂



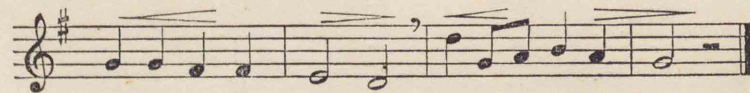
1. イ ソ ヤ マ カ ゼ フ キ タ エ テ
 2. あ ま げ の そ ら し づ む は な
 3. ヨ サ ム ノ マ ド ツ モ ル エ キ



ナ ミ ナ キ ウ ミ ツ キ マ ロ シ
 そ こ と も な き つ む い か な リ
 オ ト ナ キ オ ト シ ヅ カ ナ ヲ



ミ ダ レ ヌ カ ゲ イ ザ サ ラ バ
 い ろ こ き つ ゆ い ざ さ ら ば
 ヌ カ シ キ モ ノ イ ザ サ ラ マ



フ ネ ナ が シ テ テ ニ ト ラ ン
 そ で ぬ ら し て み に と め ン
 カ キ ア ツ メ テ フ ミ ヨ マ ン

静 寂

三

静 寂

山 田 美 妙

一 磯山風 吹き絶えて、波なき海 月圓し。

二 亂れぬ影 いざさらば、船流して手に取らん。』

三 雨氣の空、沈む花、其所ともなき 蒸す薫。

色濃き露、いざさらば、袖濡らして身に留めん。』

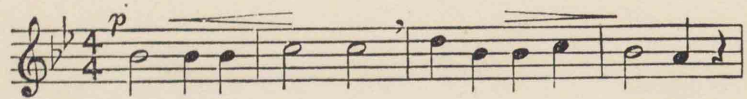
夜寒の窓 つもる雪、音なき音しづかなり。

ゆかしきもの、いざさらば、かき集めて 書讀まん。』

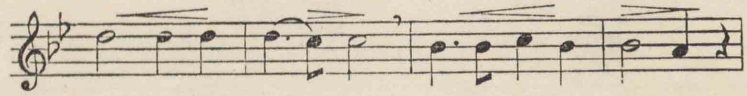
静 寂

三

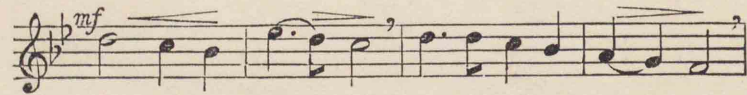
初秋の風



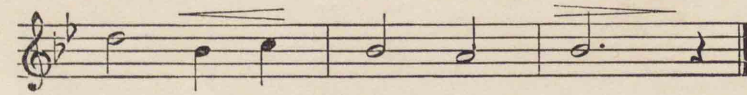
1. ウチソ ヨク チキノウ ハバ
 2. なつご ろも うすきも のと



ウチナ ビーク ハキノシ ズエ
 このあ さーけ みにおぼ えて



ア キキ ヌート ケサフク カーゼ
 に は の もーの うちみづ さーへ



メ ニ モ ミ エ テ
 い か に ー む

初秋の風

鳥居 悦

二

夏衣薄きものと、此の朝け身に覺えて、

庭の面の打水さへ、いかにせむ。』

一

打そよぐ萩の上葉 打なびく萩の下枝。

秋來ぬと今朝吹く風、目にも見えて。』

港

港



1. ソーラモ ミナトモ ヨハハレ テ
2. はーやし なしたる ほばしら に



ツーキニ カズマス フネノカ ゲ
はーなと みまがふ ふなじる し



ハシケノ カヨヒ ニギヤカ ニ
つみにの うたの にぎはひ て



■ セクル ナーミモ コガネナ リ
みなとは いーつも はるなれ や

三

港

港

一 空も港も 夜ははれて、

月に数ます 船のかけ。

端艇のかよひ にぎやかに、

よせくる波も 黄金なり。』

二 林なしたる 檣に

花と見まがふ 船旗章。

積荷の歌の にぎはひて、

港はいつも 春なれや。』

旗野士良

四

月 見

月
見



1. ク マ ナ ク テ ラ ス ア キ ノ ツ キ
2. か が み の ご と き け ふ の つ き



ミ チ タ ル カ ゲ ハ ケ フ ロ ト ヨ ナ ミ ナ キ
く も ら ぬ か げ も め づ ら し ヤ わ が す む



ミ ツ ニ フ ネ ウ ケ テ ソ ラ マ デ
さ と な し た に し て う み た も



ツ ツ ク ウ ナ バ ラ ニ サ チ ー サ サ ン
の ぞ む を か や ま に の ぼ り み ー ん

三

月
見

月 見

高 山 芳 雄

一 くまなくてらす秋の月、みちたる影は今日一夜。
波なき水に舟うけて、

空までつづく海原に

さをさゝん。

二 鏡のごとき今日の月、くもらぬ影もめづらしや。

わがすむ里を下にして、

海をものぞむ岡山に

のぼり見ん。

三

鸚 鵡

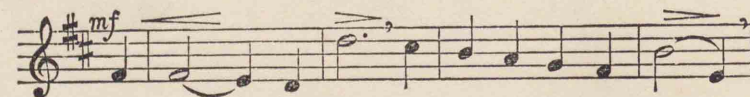
鸚 鵡



1. ウレ - シ ヤ キ ク ノ ハ ナ ガ -
2. か ご - な る あ う む の と リ -



サ イ タ - ヨ ト フ ガ イ ヘ バ
け ふ も - ま た と も と し て



ウレ - シ ヤ キ ク ノ ハ ナ ガ -
さ び - し き ま どの う ち も -



サ イ タ - ヨ ト カ レ モ イ フ
わ す れ - つ つ く ら し け リ

EK

鸚 鵡

一

嬉^{うれ}し

や、

菊^{きく}の

花^{はな}が

わ

が

言^いへば、

鸚

鵡

大和田建樹

二

籠^{かご}な

る

鸚

鵡

の

鳥^{とり}

淋^{しみ}し

き

窓^{まど}の

内^{うち}も

暮^くし

け

り。』

今^け日^ふ

も

また、

友^{とも}と

して、

嬉^{うれ}し

や、

菊^{きく}の

花^{はな}が

か

れ

も

言^いふ。』

忘^{わす}れ

つ

、

暮^くし

け

り。』

四五

三種の神器



1. テーニカカレルシツゲツセイ
 2. かがみはひのたいぶんめいせい
 3. ターマハキヨクメウツキシゲん
 4. つるぎはほーしウボクラウ
 5. シンチヨククラウボクラウ



チーニハミクサノカナンタカ
 あーめがししたてるまつり
 ナモヤサカニノ一ヒロガ
 がうリカたふとぶち
 キーミンノタカラハハシ



チイホノアキノ一キ一ハミナク
 さーんかかさうもくせーいせト
 オクテウナツク一キ一いノ
 セーイヤニカシコクウリヤケツ
 アーヤニカシコクウリヤケツ



へイーエニト一シテカガヤケリ
 たーかんきいーやしきヘだてな
 せーけつヒニやしノヘスガマア
 くわつはげミクニゾタガヒナナ
 サカユクミクニゾタガヒナナ

三種の神器

四六

三種の神器

三種の神器

杉谷代水

一 天に懸れる日月星
 二 鏡は日の體分明に
 三 山河草木生々と
 四 玉は曲妙月の精
 五 億兆なつく君の徳

一 地には三種の神器
 二 炳焉として耀けり
 三 天が下照るまつりごと
 四 高き卑しき隔て無し
 五 名も八坂瓊のひろがりて

一 善悲柔和の象あり
 二 剛利を貴ぶ智慧の相
 三 果決はげにも勢力なり
 四 君の器は臣の規
 五 榮ゆく皇國ぞ類ひなき

紅葉



1. サ ダ メ ナ グ シ ア レ テ ロ タ ル
 2. な と め こ が い で て こ ひ よ ぶ
 3. カ ミ サ ヒ テ ミ ャ ャ シ ロ ノ



ア キ ノ ア メ ニ イ ロ ジ キ ニ ク リ
 い け の う へ に う つ り て に ほ ふ
 カ キ ノ ウ チ ニ ヒ ト モ ト テ ラ ス



キ ギ ノ モ ミ ナ バ
 に は の も み ぢ ー ば
 モ ヲ ノ モ ミ ナ バ

紅葉

上田好樹

一 さだめなく しぐれて渡る 秋の雨に、

色づきにけり、木々のもみぢ葉。』

二 少女が いでて鯉よぶ 池の上に、

うつりてにほふ 庭のもみぢ葉。』

三 神さびて 見ゆる社の垣のうちに、

ひと本てらす 森のもみぢ葉。』

湖上の花



1. カガミーノー イートクータヒラカニ
 2. むかしーのー みーやーこーあともなく
 3. ササナーミー ターテーテーフクカゼモ



スームーヤー ビハコーノー ミヅーノウヘ
 たーえーてーさびしーきーしがーのさと
 ケーサーハー シヅケーキー ミヅーノウヘ



ウツルーハー ユーキーカー シラクモカ
 にーほーふー さくらーのー いるばかり
 ニゴサーヌー ホードーニー フタツミツ



ウゴカーヌー カーゲモオモーシロヤ
 かばらーぬー はーるのくるーごと に
 コボレーシー ハーナモ ナツーカシヤ

湖上の花

大和田建樹

一 鏡の如く、たひらかに すむや、琵琶湖の水の上

うつるは雪か。白雲か。

動かぬ影もおもしろや。』

二 むかしの都あともなく たえて淋しき志賀の里

にほふ櫻の色ばかり

變らぬ春のくるごとに。』

三 さゝなみたてゝふく風も けさは静けき水の上

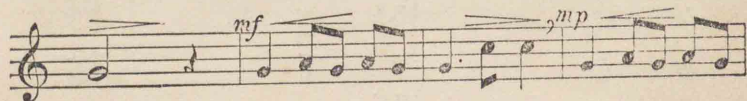
にござぬ程に、二つ、三つ、

こぼれし花もなつかしや。』

四季の雨



1. ハ ナ ノ ウ ヘ ニ コ ホ レ カ カ ル ハ ル サ
 2. い け の お も に け む り わ た る さ み だ
 3. も み ぞ ソ メ シ モ リ ニ ソ ソ ケ ア キ サ
 4. か れ の さ む く ふ る は ふ ゆ の む ら さ



メ フ レ ヤー フ レ ヤー ア シー ター
 れ た う ー ぶ ー ゼ ぶ と ふ る ー も ー
 メ モ ノ ー ナー ガ モ フ マ ドー ナー
 め い け ー の ー な し の ゆ め ー も ー



マ デ モ ハ ラー ハー ラ ホ ロ ホ ロ
 う れ し は らー はー ら ほ ろ ほ ろ
 ウ チ テ ハ ラー ハー ラ ホ ロ ホ ロ
 さ め て は らー はー ら ほ ろ ほ ろ

四季の雨

上田好樹

一 花の上はなの上にこぼれかゝる春雨はるのあめ

二 池いけの面おもてにけむり渡る五月雨さみだれ

三 紅葉もみぢそめし森もりにそゞく秋雨あきさめ

四 枯野かれのさむく降ふるは冬ふゆの村雨むらさめ

池いけのをしのゆめも覺さめてはらく、ほろく。』

『ものをおもふ窓まどをうちてはらく、ほろく。』

『紅葉もみぢそめし森もりにそゞく秋雨あきさめ

『池いけのをしのゆめも覺さめてはらく、ほろく。』

雪中の梅松



1. フ リ ツ モ ル ユ キ - ナ シ
 2. と き は な る ま つ - に な



ノ - ギ - テ - サ ク - - - ウ - - - - メ - - - ハ
 ら - ひ - て - ふ る - - - ヲ - - - - き - - - の



マ ツ ノ - - - ミ サ チ ニ - - -
 う ち に - - - も た も - て - - -



オ ト ラ - ザ リ - - - ケ - - - リ
 き よ き - み さ - - - な - - - な

雪中の梅松

一 降りつもる

雪を凌ぎて 咲く梅は、

松の操に おとらざりけり。』

下田歌子

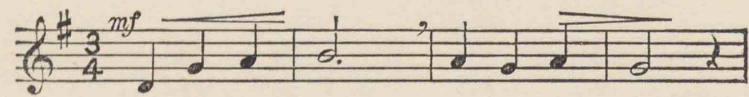
二 ときはなる

松にならひて、 ふる雪の

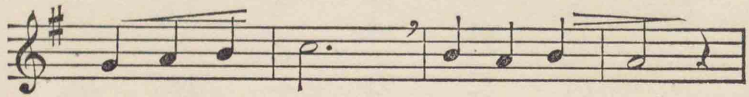
うちにもたもて、 清き操を。』

早春の鶯

早春の鶯



1. ハルケル ヤガテモ
2. わがやの うめがえ



タニノト タチイデ
さきづる のきばに



ヨソヨリ サキニクル
けさよりに くらならす



ワグヒスー カハユヤナ
うぐひすー かほゆやな

六

早春の鶯

早春の鶯

鳥居 悦

七

一 春來る やがても 谷の戸 立出で、

餘所より 先に來る

鶯かはゆやな。』

二 我家の 梅が枝 咲き出る 軒端に、

今朝より 口馴らす

鶯かはゆやな。』

月の瀬

藤田俊

一 よしのは春の櫻がり。龍田は秋のもみちがり。

紅葉も花もまだしらぬ 世にさきがけの名も高き

梅は、月の瀬。月雪の

外にひとつの見どころぞ。』

二 雪げの水もきのふけふ 歌こゑたつる名張川

かなたこなたに枝かはす 千本の梅の花みれば、

星の林か、白雲か。

かをりぞ空に満ちわたる。』

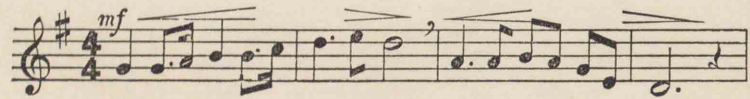
三 村より村にさきつゝく 梅より梅の夕月夜。

おもひぞいつる春毎に、心かなたにゆきかひて、

かすむか。今も麗しく

伊賀と大和の山かけに。』

月の瀬 (其一)



1. ヨシノハハルノ サクラガーリ
 5. ゆきげのみづも きのふげふ
 3. ムラヨリムラニ サキツツク



タツタハアキノモミザガーリ
 うたごゑたつるなばりがは
 ウメヨリウメノユフヅキヨ



モミザモハナモマダシーラヌ
 かなたこなたにえだかばす
 オモヒゾイヅルハルゴートニ

月の瀬 (ついき)



ヨニサキガケノ ナモタカーキ
 ちもとのうめの はなみれば
 ココロカナタニ ユキカヒテ



ウメハツキノセ ツキユキノ
 ほしのはやし しらくもか
 カスムカイマモ ウルハシーク



ホーカニヒトツノ ミドコロゾ
 かなりぞそらにみちわたる
 イーガトヤマトノ ヤマカゲニ

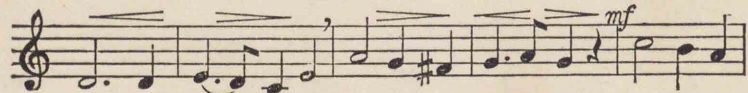
磯千鳥



1. ウー ツー ナー ミハ イー ソチ ア ラ ヒ
2. ふ たつ み ー つ み ー えて ゐ たる



シー ホー カゼ ハ マツ ナ フ ク
い さ ー り び も き え は て て



フ ケ ラ ー タ ル フ ユ ノ ヨ ハ ニ ネ ム ル
と り だ ー い の ひ か り ば か り な み の



フ ナ コ イ ツ カ タ ソ ム レ テ ユ ク
う へ に よ こ た は る し づ か な る



チ ド リ ノ カ ゲ バ カ リ ナ ナ ツ ヤ
う な ば ら う れ し げ に ゆ く こ ぶ



ツ は サ ム キ ソ ラ ニ ミ ー エ テ
は つ き の ま へ の ち ー ど り

磯千鳥

大和田建樹

一 打つ波は磯を洗ひ、汐風は松を吹く。

更けわたる冬の夜半に、眠る舟子いつかたぞ。

群れでゆく千鳥の影ばかり七つ八つ、

寒き空に見えて。』

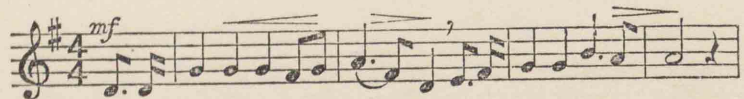
二 二つ三つ見えて居たる いさり火も消えはてて、

燈臺の光ばかり 波の上に横たはる。

静なる海原 嬉しげに行く聲は、

月の前の千鳥。』

露 營



1. ヲツ マクハサーエーンウシホノゴトク
2. あしたのしんぐーんおもへばたのし



トド ロクハサーセーイイカヅチナシテ
にくばやなどーりーてめもまたあはず



セメ イルロガカンヒラメクコクキ
かたむくつきかげさんじかよじか



イサメヤイサメーハヤノリトレト
ぐわいたうまぐらのみをうちおこし



イフカトミレメーハンヤノイチム
こきやうのふぼにーひとふでかかーん



マクラニノコルーツキカゲシロシ
るえいのよつゆをやたてにうけて

露 營

六

露 營

大和田建樹

露 營

六

一 渦巻く砲煙うしほの如く、

攻入る我軍、ひらめく國旗

いふかと思れば半夜の一夢

二 あしたの進軍、思へば樂し。

傾く月影三時か四時か、

故郷の父母に一筆かゝん、

轟く砲聲いかづちなして、

勇めや勇め、はや乗り取れと、

枕に残る月影しろし。』

肉はや踊りて目もまた合はず。

外套まくらの身を打ち起し、

露營の夜露を矢立にうけて。』

この辞書



1. マ ナ ビ ノ マ ー ド ノ ア サ ユ フ ニ
 2. セ ガ ハ の キ ン も ジ ナ ツ カ シ ク
 3. ト モ ノ ナ サ ケ ヨ シ ノ ガ ン ヨ



ツ ク エ ノ カ タ ハ ラ ヒ ザ ノ ウ ヘ
 ベ ー ジ に の こ れ る ゆ び の あ と
 チ カ ヒ テ ナ チ ナ シ ミ ナ タ テ



ハ ナ レ ス ト モ コ ソ コ ノ シ シ ヨ ヨ
 わ が し ば こ れ よ ー こ の じ し よ よ
 オ モ ヘ メ タ フ ト キ コ ノ シ シ ヨ ノ



ナ レ シ タ シ ミ シ モ イ ク ト セ カ
 な し へ な う け し ば い く た び か
 フ ー カ キ メ グ ミ チ ア ダ ニ セ シ

この辞書

六

この辞書

七

この辞書

長岡 牛 櫻

一 まなびの窓の朝夕に、机のかたはら、膝のうへ、

はなれぬ友こそこの辞書よ。馴れ親みしも、幾年か。』

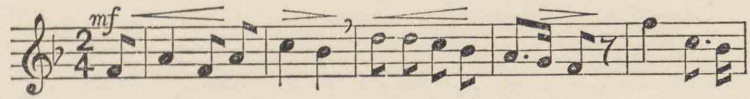
二 背革の金文字なつかしく、ページに残れる指のあと。

わが師はこれよ。この辞書よ。教を受けしは、幾度か。』

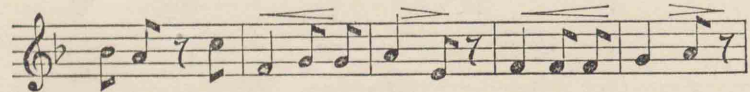
三 友の情よ。師の恩よ。誓ひて名を成し、身を立て、

思へばたふときこの辞書の 深き恵をあだにせじ。』

卒業生に別るゝ歌



1. シバシトモヨケフノマトーキワカレ
2. さらばともよなれがみちーにまさき



サノナゴリツゲンミチビキ
くていざゆけゆけもろごゑに



キノフノナサクチオモヘバウレ
ながさらいははんやよーわすーるー



シアナーターノモシイザヤサーラーバ
なこのーまーじはりいざやさーらーば

卒業生に別るゝ歌

カ

卒業生に別るゝ歌

杉谷代水

一 しばし友よ、けふの圓居、別れ路の名残告げん。

みちびきしきのふの情を、思へばうれし、あなたのもし。

いざやさらば。

二 さらに友よ、汝れが道にまさきくて、いざ行けく。

もろ聲に 汝が幸いはん。やよ忘るな、この交り。

いざやさらば。

卒業生に別るゝ歌

究

師を送る



1. マ ナ ビ ノ ニ ハ ノ チ チ ハ ハ ト
2. わ か れ て の ち も み を し へ は



ア フ キ マ ツ リ シ シ ノ キ ミ ニ
か た く ま も り て は げ ま ま し



ロ カ ル ル ケー フ ノ カ ナ シ サ ヨ
ちーちのめぐみのひとつだに



オ モ ヘ バ サ メ ヌ ヌ メ ニ ニ テ
むくゆるみちと なるまで に

師を送る

三

師を送る

七

師を送る

一

まなびの庭の父母と
仰ぎまつりし師の君に

わかるゝけふのかなしさよ、

思へば、さめぬ夢に似て。』

二

わかれて後も、みをしへは
かたく守りて、勵まゝし、

千々のめぐみの一つだに

むくゆる道と なるまでに。』

橋本光秋

第四度音程練習

完全四度 完全四度 完全四度

增四度 完全四度 完全四度 完全四度

11

12

第五度音程練習

完全五度 完全五度 完全五度

完全五度 完全五度 完全五度 減五度

13

14

第二度音程練習

長二度 長二度 短二度 長二度 長二度 長二度 短二度

一
附
錄

Exercise 6: A sequence of seven intervals: two long seconds, one short second, and four long seconds.

Exercise 7: A sequence of seven intervals: four long seconds, two short seconds, and one long second.

Exercise 8: A sequence of seven intervals: four long seconds, two short seconds, and one long second.

6

7

8

第三度音程練習

長三度 短三度 短三度 長三度 長三度 短三度 短三度

一
附
錄

Exercise 9: A sequence of seven intervals: one long third, two short thirds, and four long thirds.

Exercise 10: A sequence of seven intervals: four long thirds, two short thirds, and one long third.

9

10

9

發聲及音階練習

一
附
錄

1

ア ア ア ア ア ア ア ア

ア ア ア ア ア ア ア ア

2

ア エ ア エ ア エ ア エ

ア エ ア エ ア エ ア エ

エ ア エ ア エ ア エ ア

3

ア エ イ ア エ イ ア エ イ ア エ イ

ア エ イ ア エ イ ア エ イ ア エ

イ ア エ イ ア エ イ ア エ イ

三

一
附
錄

4

ア エ イ オ ア エ イ オ ア エ イ オ ア エ イ オ

ア エ イ オ ア エ イ オ ア エ イ オ ア エ イ オ

ア エ イ オ ア エ イ オ ア エ イ オ ア エ イ オ

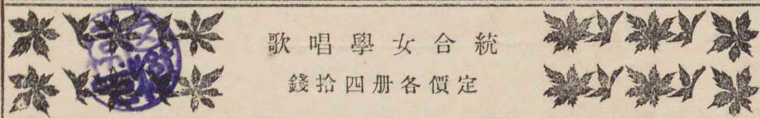
5

ア エ イ オ ウ ア エ イ オ ウ ア エ イ オ ウ ア エ イ オ ウ

ア エ イ オ ウ ア エ イ オ ウ ア エ イ オ ウ ア エ イ オ ウ

ア エ イ オ ウ ア エ イ オ ウ ア エ イ オ ウ ア エ イ オ ウ

三



統合女學唱歌
定價各冊四拾錢

梅
印
著

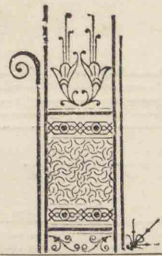
明治二十四年二月十八日發行
 明治二十四年二月廿二日發行
 明治二十四年四月三十日訂正再版印刷
 明治二十四年四月廿二日訂正再版發行

著作權有所不許漢譯

著者	發行者	印刷者	發行所	販賣所
開成館音樂課	西野虎吉	渡邊八太郎	開成館	林平次郎
東京市小石川區小日向水道町七十三番地	東京市牛込區榎町七番地	東京市小石川區小日向水道町七十三番地	大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角	東京市日本橋區數寄屋町九番地
			三木佐助	

【振替貯金口座】東京第五卷貳番

日清印刷株式會社印刷



第一卷附錄

發聲練習
音階練習
音程練習





THE KAISEIKWAN'S MUSIC SERIES.

新編 教育唱歌集

教育會樂譜協會編纂

全一冊 正價四拾錢

普通樂典教本

開成館音樂課編纂

全一冊 正價四拾錢

初等 樂典教科書

山田源一郎・多梅雅共著

全一冊 正價五拾五錢

近世 樂典教科書

山田 虎 巖 著

全一冊 正價四拾錢

教習用 進行曲粹

開成館音樂課編纂

全二冊 正價八拾五錢

初等 オルガン教科書

天谷秀・多梅雅共著

全一冊 正價五拾錢

ヴァイオリン教則本

開成館音樂課編纂

全二集 各集五拾錢

開成館藏版



広島大学図書

2500014310

